

撮影場所：(株)金龍 遊佐蒸溜所



さいとう みほ
齋藤 美帆 さん

平成6年生まれ、酒田市出身、酒田市在住。(株)金龍 製造課・遊佐蒸溜所勤務。山形大学農学部卒業後、2017年入社。入社半年後から当時は構想段階だった蒸留所開設準備室に配属される。現在、主に蒸留工程を担当し、糖化・発酵工程もサポートする。

まつもと しん かず
松本 晋一 さん

昭和45年生まれ、千葉県出身、東京都在住。(株)IBUKI 代表取締役社長。2014年、河北町にある(株)IBUKI(旧安田製作所)の経営に参画。2018年には第7回ものづくり日本大賞 経済産業大臣賞「ものづくり+企業」部門を受賞。鶴岡工業高等専門学校 特別講師、東北芸術工科大学 特別研究員も務める。

おか だ しお ね
岡田 汐音 さん

平成6年生まれ、北海道出身、酒田市在住。(株)金龍 製造課・遊佐蒸溜所勤務。山形大学理学部卒業後、2018年入社。大学で学んだ専門を生かし、糖化・発酵工程に携わるほか、広報・デザイン、営業・来客対応を担当する。

keyword

山形のものづくりに新しい息吹、未来への取組み

伝統の技術とAI(人工知能)を生かし、製造業に新たな価値と可能性を吹き込む松本さん、山形初のウイスキーづくりにゼロから挑戦する岡田さん、齋藤さんに、山形でものづくりについてお話をお聞きました。

製造業の支援と
山形県のものづくりへの貢献

製造業向けコンサルティング、設計者育成をはじめとする技術支援、社会に役立つAI※の導入など、製造業を中心に先進的な取組みを進めてきた松本さん。

河北町の歴史ある金型メーカーのIBUKIに経営参画し、経営改革と金型のブランド化を実践。業績不振に困窮する同社に大復活劇をもたらし、経済産業省の「地域未来牽引企業」にも選定されました。

「現在は、山形県やそれ以外の地域に、売上100億円企業を45社作り出すことを目標に、地元企業経営者ジュニアを対象とした経営塾の開催などを行っています」。



高級ガラスのような透明度と質感を実現した極薄で割れない、メイド・イン・ヤマガタの樹脂製ビアグラス。IBUKIが創業以来80年培ってきた金型の設計・製造技術が生かされている。

※Artificial Intelligence(人工知能)の略。人間のように知的な処理能力を持つ情報システム。

松本さんはこうも言います。

「金型は山形県の伝統工芸品だと思っています。その存在を継続させて将来につないでいくストーリーを作ることが自分の役目だと考えています」。

未経験の女性二人から
始まったウイスキーづくり

一方、遊佐蒸溜所で全く経験のないウイスキーづくりを任せられることになった齋藤さんと岡田さん。

特に齋藤さんは、金龍の会社説明会に参加したときは、まだ同社がウイスキー事業に参入することを知らなかったと話します。

「地元で、食品関係の仕事に関わりたいと思っていました。酒づくりはおもしろそうだと興味があつたものの、ウイスキーをつくる話を初めて聞かされたのは入社当日でした」。

焼酎とウイスキーは共に蒸留酒であるため、これまで培ってきた酒造技術が生かされたのかと思いきや、同社の佐々木雅晴社長は、ウイスキーへの敬意を込めて、あえて焼酎づくりの職人ではなく、未経験者によるウイスキー



遊佐町の田園風景の中に建つ蒸溜所。背景には、ウイスキーづくりに欠かせない豊富な伏流水をもたらす鳥海山の風景が広がる。貯蔵庫の地下にも水脈が通り、熟成に必要な湿度を保つ。

キーづくりを決意されたと言います。蒸留所開設前の準備段階から関わった齋藤さんが話を続けます。「何をどう始めてよいか誰も分からなかったため、ウイスキーの本場スコットランドの設備メーカーから技術のレクチャーを受けました。すべて英語なので通訳を通し、分からないところは教本を読み、少しずつ覚えながら自分たちのづくり方を決めていきました」。

齋藤さんの1年後に入社した岡田さんは、大学進学のため山形に来て、自分の世界が広がったと言います。「知る人のいない土地で、一から人間関係を築き、また新たな趣味もできました。その経験から、新たにチャレンジしていく楽しさがあるウイスキー事業に魅力を感じ、この地に残ることを決めました」。

伝統と先進技術、
アナログとデジタルの融合

二人の話に耳を傾けていた松本さんが口を開きます。

「お二人とも、先入観がそもそもなかったこともあり、変化を嫌がらない姿勢が素晴らしいですね」。

私がIBUKIで行った最も大きな経営改革を一つだけあげるなら、変化を日常化し楽しむこと、変化を当たり前前に受け入れるという社員の意識改革です」。

松本さんは、後継者不足で技術の継承が難しくなっている、各地の伝統工芸などの熟達者の思考や技術をAIで見える化し、社会全体で広く

活用できる取組みを進めています。

また、昨年10月には、山形県内11高校の生徒が部活動として参加してAIを学ぶ「やまがたAI部」運営コンソーシアム(共同事業体)を発足させ、その代表に就きました。

「産学官および金融機関が参加し、奨学金制度を設けるなど、AI関連の人材育成を目的に設立しました。すでにこのコロナ禍のなかでもオンラインでの講義が始まっています。今後は、育成した人材が地元企業で活躍できる仕組みもつくっていきます」と松本さん。



IBUKI社屋前に集合した「やまがたAI部」に参加する高校生。山形県、山形市、鶴岡市、酒田市、山形大学、東北芸術工科大学、東北公益文科大学のほか、県内企業、金融機関などが運営に関わる。

さらにこう続けます。

「長い伝統を持つ優れた技術の継承と、AIを生かした効率化、つまりアナログとデジタルの融合がこれからのものづくりには不可欠です」。